

## かっぱの証文

時は天明三年、1783年。

黒田のお殿様が福岡・博多を治めていた頃のお話しです。

六代藩主黒田継高（つくたか）のときに、

百道海岸の近くに藩士屋敷を設けました。

「ちんちく堀」という生垣の名残を見ることができます。

さて、ここに移り住むこととなった小金丸、有村、筒井という藩士の屋敷には、

歳の頃では12～3歳の腕白息子たちがいて、

毎日三人で仲良く遊んでいたそうです。

当時、この界隈の藩士たちは禄高の低い武士が多く、

非番の日には金滑川や室見川で江切という漁法で魚を獲っていたそうです。

そして獲れた魚はこの近辺に六、七軒あった江切小屋というところに一旦持ち込んでいたそうです。

そんな初夏のとある折、その小屋から大事な魚が度々盗まれるという事件が起きました。

これを知った三人の腕白息子たちは魚泥棒を捕えようと、

夕方からひそかに小屋を見張ることにしました。

すっかり日が沈んだ時分でした。

サクサク、サクサク …

砂浜を歩く足音が近づいてきました。

小柄なその影は小屋の中へと入っていきました。

これは怪しいと思って三人が小屋へ近寄ると、

魚の入った大きなカゴを軽々と抱えた小僧が出てきました。

「見つけたぞ、この魚泥棒め～！」

三人は一斉につかみかかりましたが、頭の上に皿をかぶったこの小僧は、

すさまじい力で三人をひょいと投げ飛ばしました。

そのとき小金丸は父親から聞いた河童の話をついに思い出しました。

そこで三人がかりで河童に抱きついて、

なんとか頭の皿の水をこぼしました。

こうなるとさすがの河童も神通力を失い、

縄で縛りあげられてしまいました。

「大事な魚を盗むとはなんてやつだ。こらしめてやらねば！」

と、そのとき、海から二匹の親河童が上がってきました。

「どうぞ、子河童をお放しください、お願いします、お願いします」

親河童は三人に何度も何度も許しを乞いました。

「それではこの始末はいつたいどうしてくれるのだ！」

「お礼としまして、この後（のち）八十年間は百道の海で

溺れ死にをする人間がないようにいたします」

「八十年も約束を守られるはずはない。河童の言うことなんか信じられるか！」

「嘘は申しません。嘘でない証拠に、

ちゃ~んとこの約束を守る、という証文を書いてお渡しいたしますので…」

事実、この百道の海では、毎年夏には必ず溺れ死にをする者がいたので、

三人は証文と引き換えに子河童を放してやることにしました。

親河童はさっそく証文を書き、海岸から程近い藤崎の千眼寺というお寺にこれを預けました。

このことがあって以来八十年もの間、河童の約束通りに、

百道の海ではだれひとりとして溺れ死ぬ者はいなかったということです。